パラオに残存する日本語の可能表現

渋谷勝己
（大阪大学）

The remnants of Japanese in Palau: Potential expressions

SHIBUYA Katsumi
(Osaka University)

【キーワード】パラオ，可能表現，単純化，第二言語維持，危機言語

【要旨】
本報告は，シナリオのデータおよびヤップのデータと比較しつつ，パラオに残存する日本語可能表現の特徴を明らかにすることを目的とする．分析の結果をまとめれば次のようになる．

(a) シナリオ（ベースライン）データとくらべたとき，パラオの可能表現には，日本語母語話者の使用する可能表現に近い実態が観察されるが，助動詞レルを多用する点が特徴的である（3.2.1）．

(b) パラオのインフォーマントの間には，日本語能力を反映した違いがいくつか見出される．たとえば，買エラレルといった過剰一般化形式を使用する（話者T），VNデキルを使用する（話者L），スルコトガデキルを使用する（話者A・T），デキルの汎用が観察される（話者M・Y），といった違いである（3.2.2）．

(c) パラオのデータを，同じ旧南洋群島に属するヤップのデータとくらべたとき，助動詞レルの使用・スルコトガデキルの使用・デキルの汎用といった共通点がある一方で，VNデキルの使用の有無（パラオで有），可能動詞・スルコトガデキル・単独あるいは名詞後接のデキルの使用率（可能動詞はパラオで高，他はヤップで高，4.3）といった点に違いがある．

(c) の違いについては，戦前・戦中にかけて日本人が多数居住していた，あるいは練習生の制度が設けられていたといった，パラオの日本語習得環境がヤップよりも有利に働いて，パラオの日本語話者のほうが高い日本語能力を維持しているといったことが考えられるが，母語の影響がそこに介在している可能性もまだ否定できない．今後の検討課題である．

1　はじめに

先に渋谷（2001）では，現在，パラオ共和国に日本語が残存するにいたった，社会言語的な背景をまとめた．本稿では，パラオに，具体的にどのような日本語の変種が残存するのか，可能表現を例にして確認することを目的とする．

構成は次のとおり．最初に調査の概要をまとめたあと（2節），シナリオに現れた可能表現をベースラインデータとして，パラオの日本語の可能表現を分析する（3節）．また，同じ旧南洋群島に属するミクロネシア共和国ヤップ島の可能表現の実態と対照することによって，パラオの可能表現がもつ特徴をより明確にすることを試みる（4節）．

2　調査の概要

われわれは以前，本プロジェクトによる調査（以下「今回調査」とする）とほぼ同様の手法を用いて，同じ地域で調査を実施したことがあるので（1994～1996年度文部省科学研究費補助金・国際学術研究「旧統治領南洋群島に残存する日本語・日本文化の調査研究」，以下「前回調査」とする），本稿では，2つの調査でえられたデータの両者を分析の対象とすることにする．ただし調査の目的については，今回調査はパラオに残存する日本語の包括的な記述をめざしているのにたいして，前回調査は，戦前・戦中に行われた日本語教育の実態を解明しつつ，今日にいたるまでの日本語・日本文化の維持・摩滅のありかたを明らかにすることを目的としたという違いがある．

以下，2つの調査で採用した談話データの収集法の概要を記す．

Ⅰ．今回調査

(a) 場所　　：パラオ（ベラウ）共和国コロール州およびアイライ州

(b) 調査期間：2000年8月5日～20日，2001年8月8日～21日

(c) 調査者　：渋谷

(d) 調査法　：インフォーマント一人一人を個別的に訪問し，インタビューを行った．話題は公学校での教育，日本時代の思い出などが中心である．このインタビューを録音・文字化したものを，本稿の分析対象とした．

Ⅱ．前回調査

(a) 場所　　：同上

(b) 調査期間：1994年8月19日～25日，1995年7月30日～8月17日

(c) 調査者　：(1994 年) 崎山理・由井紀久子・渋谷，(1995 年) 渋谷

(d) 調査法　：同上

両調査のインフォーマントは，戦時中に日本語（国語）教育を受けた，60 歳以上（調査時）の老年層男女である．本稿では，日本語能力を異にすると思われる，渋谷（1997）と同じ，表 1 の 5 名の会話データを分析の対象とする．前回調査については調査した年度を，また今回調査については 2000 年度と 2001 年度の調査の実施状況を記載した（「－」はインフォーマント逝去のため，調査せず）．なお筆者の印象では，この順番（L＞A＞T＞M＞Y）で日本語能力が高いと思われる．

以下，それぞれのインフォーマントのインタビューデータについて，最初の 45 分を分析の対象とする．

表 1　インフォーマント一覧（パラオ）

ｲﾝﾌｫｰﾏﾝﾄ	性別	生年	日本語学習歴	前回調査	2000	2001
L	M	1929	公学校本科・補習科	1994	○	○
A	F	1930	公学校本科・補習科	1995	○	○
T	F	1930	公学校本科・補習科	1995	○	○
M	F	1929	公学校本科・補習科	1994	○	－
Y	M	1933	公学校本科	1994	－	－

なお，戦時中にこの地においてどのような日本語（国語）教育が行われたか，また学校以外にどのような日本語習得環境があったかといった，習得を取り巻く社会言語的条件の詳細，あるいは，推定される現在の日本語話者数などのデモグラフィックな情報については，渋谷（2001）を参照されたい．

3　分析

本節では，パラオに残存する日本語の可能表現について，まず，45 分の会話データのなかに現れた可能形式の用例数の分布を整理する（3.1）．続いて，その形式面での特徴を明らかにすることを試みる（3.2）．

３．１　可能形式の用例分布：パラオ

表2〜表4に，各インフォーマントの各年各45分のデータのなかでえられた可能形式の用例数の分布を示す．また表5に3回の調査の合計を，表6に，ベースラインデータとして，シナリオ（山田太一『青春スケッチブック』の「省一」の発話）に現れた可能形式の用例数を示した．各表の見方は次の通り．

(a) 形式

【(ラ) レル・五段】＝五段動詞＋助動詞レル

(1) 忙しくて手紙が書かれない

【(ラ) レル・他】＝一段・カ変動詞＋助動詞ラレル

(2) 忙しくてテレビが見られない

【可能動詞・五段】＝五段動詞派生可能動詞

(3) 忙しくて手紙が書けない

【可能動詞・他】＝一段・カ変動詞派生可能動詞（ラ抜きことば）

(4) 忙しくてテレビが見れない

【デキル・スルコトガ】＝スルコトガデキル

(5) 忙しくて手紙を書くことができない

【デキル・VN】＝VN（動名詞）デキル

(6) もう我慢できない

【デキル・－】＝動名詞ガ＋デキル，デキル単独使用等

(7) もう我慢ができない（動名詞ガ＋デキル）

(8) いつかはできるだろう（デキル単独使用）

(b) 上段・下段（「デキル・－」を除く）

上段：延べ用例数　　下段：異なり動詞数

(c) 使用率

延べ数による．

なお，「できないできない」などの単純な反復は1例と数えたが，「これはできますが，それはできません」のような，単純な反復ではない例は，（この場合は「デキル・－」の）2例とした．また，当該可能形式の初出が，調査者が使用した形式の反復である場合には，自発的な使用ができるかどうかわからないところがあるので，表のなかではカッコに入れて示した．内数．

表 2　1994～1995 年調査（計 44 例）

	（ラ）レル		可能動詞		デ　キ　ル			その他
	五段	他	五段	他	ｽﾙｺﾄｶﾞ	ＶＮ	―	
L	1	1	6	-	-	1	1	
	1	1	4	-	-	1		
A	-	1	8(1)	-	1	-	1	
	-	1	3(1)	-	1	-		
T	-	-	2	-	1	-	2	見エラレル 1
	-	-	2	-	1	-		買エラレル 3
M	-	-	-	-	-	-	4	
	-	-	-	-	-	-		
Y	3	-	3 (2)	-	-	-	4	
	2	-	2 (1)	-	-	-		
計(延べ)	4	2	19	-	2	1	12	4
使用率	9.1	4.5	43.2	0.0	4.5	2.3	27.3	9.1

表 3　2000 年度調査（計 41 例）

	（ラ）レル		可能動詞		デ　キ　ル			その他
	五段	他	五段	他	ｽﾙｺﾄｶﾞ	ＶＮ	―	
L	3	1	4	-	-	-	-	
	2	1	4	-	-	-		
A	7	-	9	-	3	-	1	
	1	-	3	-	3	-		
T	-	-	-	-	1	-	-	
	-	-	-	-	1	-		
M	1	-	10	-	-	-	1	
	1	-	4	-	-	-		
Y								
計(延べ)	11	1	23	-	4	-	2	-
使用率	26.8	2.4	56.1	0.0	9.8	0.0	4.9	0.0

表 4　2001 年調査（計 23 例，＊は 45 分未満のデータ）

	（ラ）レル		可能動詞		デ　キ　ル			その他
	五段	他	五段	他	ｽﾙｺﾄｶﾞ	VN	―	
L	1	-	1	-	-	1	3	
	1	-	1	-	-	1		
A	1	-	12(2)	-	-	-	-	
	1	-	6(2)	-	-	-	-	
T*	-	2	1	-	1	-	-	
	-	2	1	-	1	-	-	
M								
Y								
計(延べ)	2	2	14	-	1	1	3	-
使用率	8.7	8.7	60.9	0.0	4.3	4.3	13.0	0.0

表 5　3 回の調査の合計（計 108 例，Mは調査回数 2 回，Yは 1 回）

	（ラ）レル		可能動詞		デ　キ　ル			その他
	五段	他	五段	他	ｽﾙｺﾄｶﾞ	VN	―	
L	5	2	11	-	-	2	4	
	3	2	8	-	-	2		
A	8	1	29	-	4	-	2	
	2	1	6	-	3	-		
T	-	2	3	-	3	-	2	見エラレル 1
	-	2	3	-	3	-		買エラレル 3
M	1	-	10	-	-	-	5	
	1	-	4	-	-	-		
Y	3	-	3	-	-	-	4	
	2	-	2	-	-	-		
計(延べ)	17	5	56	-	7	2	17	4
使用率	15.7	4.6	51.9	0.0	6.5	1.9	15.7	3.7

表 6　シナリオにおける可能形式の用例分布（計 34 例，渋谷 1995:85）

	（ラ）レル		可能動詞		デ　キ　ル			その他
	五段	他	五段	他	ｽﾙｺﾄｶﾞ	VN	―	
S	-	6	19	-	1	2	6	
	-	3	11	-	1	2		
使用率	0.0	17.6	55.9	0.0	2.9	5.9	17.6	0.0

３．２　特徴：パラオ

表 2～表 6，およびそれぞれの発話例からは，次のようなことが理解できる．

３．２．１　全体的な傾向

パラオにおける 3 回の調査を合計した結果（表 5）と，シナリオデータ（表 6）を比較したとき，パラオの日本語では，五段動詞について，可能動詞だけではなく，助動詞レルが使われることがあることに気がつく．たとえば次のような例である（以下，例の末尾の記号と数字はインフォーマントと調査年．［　］内は報告者による注記，（　）は聞き取り不能の箇所．Ｒは調査者＝報告者を表す）．

(9) ナイトスクールというと，大人，いや，子供でもやっぱりあの，それ取られます（Ｌ1994）

(10) ［編み物は］男はあんまり作られない．女だけ（Ｙ1994）

それぞれの例について，レルと可能動詞のいずれが使われているかを動詞ごとに整理すると，表 7 のようになる．各セルの左が助動詞レルの用例数，右が可能動詞の用例数である．助動詞レルが用いられる動詞を網掛けで示した．

この表からわかることは，次のとおり．

(a) 助動詞レルと可能動詞では可能動詞を使用することのほうが多い（17 例対 56 例）．

(b) 2 例以上用いられた場合について，可能動詞のみが用いられる動詞（表 7 の「読ム」以下），可能動詞のみを使用する話者（T）はあるが，5 名の話者すべてが助動詞レルのみを用いる動詞，助動詞レルのみを用いる話者はない．

(c) レルがもっとも用いられやすいのは「行ク」であり（「行ク」の例 23 例中 12 例，52.2%），ＬとＭはイカレルを専用している．なおＹも，「行ク」について，

(11) こりゃ一縁の下．こっちこっちは上．（　）けどあんまりこの下行かれない（Ｙ1994，自発的使用例）

表 7　各動詞ごとの助動詞レルと可能動詞の使用状況（左：助動詞レル，右：可能動詞）

	L			A			T			M		Y
	1994	2000	2001	1995	2000	2001	1995	2000	2001	1994	2000	1994
行ク		2/ -	1/ -	-/ 1	7/ 1	-/ 7					1/ -	1/ 2
取ル	1/ -						-/ 1					
出ス		1/ -										
飲ム						1/ 1						
作ル						-/ 1						2/ -
読ム	-/ 1			-/ 6	-/ 4	-/ 1					-/ 4	
話ス		-/ 1		-/ 1	-/ 4		-/ 1				-/ 4	
買ウ	-/ 1											
言ウ	-/ 2								-/ 1			
習ウ		-/ 1										
使ウ	-/ 2	-/ 1									-/ 1	
ヤル		-/ 1										
払ウ			-/ 1									
歩ク						-/ 1						
書ク						-/ 1					-/ 1	
走ル												-/ 1

（12）R：それ車で行けるところですか
　　Y：行けるけどあんまり道が悪い
　　R：天気のいい日は大丈夫ですか
　　Y：今，今行ったら行ける（Y1994，調査者の先行使用あり）

のような状況が観察されるので，自発的に使用する場合にはイカレルを用いるが，イケルも使うことができるといったことがあるのかもしれない．そのほかの動詞については，用例数が少ないこともあり，助動詞レルあるいは可能動詞が用いられやすい制約条件は見出せない．ヤップで観察されたような，ラ行の動詞に助動詞レルの使用が多いといった傾向も（渋谷 1995，本稿 4 節参照），パラオではなさそうである．

(d) なお，助動詞レルをめぐっては，Aの用いた用例のなかに，次のようなものがあった．

（13）戦争がすんでからは，学校は行けな，行かれなかったんです（A2000）

（14）R：［日本人の］お店は，［日本人とパラオ人の］どっちも行けた，行けたんですか．パラオの人も
　　A：ん，あの，（　　）とか，あー，あんまり行かれなかった（A2000）

表 7　各動詞ごとの助動詞レルと可能動詞の使用状況（左：助動詞レル，右：可能動詞）

	L			A			T			M		Y
	1994	2000	2001	1995	2000	2001	1995	2000	2001	1994	2000	1994
行ク		2/ -	1/ -	-/ 1	7/ 1	-/ 7					1/ -	1/ 2
取ル	1/ -						-/ 1					
出ス		1/ -										
飲ム						1/ 1						
作ル						-/ 1						2/ -
読ム	-/ 1			-/ 6	-/ 4	-/ 1					-/ 4	
話ス		-/ 1		-/ 1	-/ 4		-/ 1				-/ 4	
買ウ	-/ 1											
言ウ	-/ 2								-/ 1			
習ウ		-/ 1										
使ウ	-/ 2	-/ 1									-/ 1	
ヤル		-/ 1										
払ウ			-/ 1									
歩ク						-/ 1						
書ク						-/ 1					-/ 1	
走ル												-/ 1

(12) R：それ車で行けるところですか
　　Y：行けるけどあんまり道が悪い
　　R：天気のいい日は大丈夫ですか
　　Y：今，今行ったら行ける（Y1994，調査者の先行使用あり）

のような状況が観察されるので，自発的に使用する場合にはイカレルを用いるが，イケルも使うことができるといったことがあるのかもしれない．そのほかの動詞については，用例数が少ないこともあり，助動詞レルあるいは可能動詞が用いられやすい制約条件は見出せない．ヤップで観察されたような，ラ行の動詞に助動詞レルの使用が多いといった傾向も（渋谷 1995，本稿 4 節参照），パラオではなさそうである．

(d) なお，助動詞レルをめぐっては，Aの用いた用例のなかに，次のようなものがあった．

(13) 戦争がすんでからは，学校は行けな，行かれなかったんです（A2000）

(14) R：［日本人の］お店は，［日本人とパラオ人の］どっちも行けた，行けたんですか．パラオの人も
　　A：ん，あの，（　　）とか，あー，あんまり行かれなかった（A2000）

(15) R：雨の水は飲めませんよね

A：飲めない？　飲まれない？　なに，どうして？（A2001）

(13) は可能動詞を使いかけて，すぐさま助動詞レルに自己訂正した例，(14) (15) は，調査者の先行発話に可能動詞が使用されているにもかかわらず，Aの発話のなかでは助動詞レルが使用された例である．これらの例だけを見れば，Aの場合には，助動詞レルが優先的に使用される形式であるかに思われるが，「読ム」や「話ス」ではAもすべての例について可能動詞を用いている．さらにAの場合，「行ク」について，2000年と2001年の調査で助動詞レルと可能動詞の用例数がほぼ逆転しているが，なぜこのような結果になったのかは不明である．

(e) いずれにしても，(a) ～ (c) のようなことを考慮すれば，パラオの話者は，動詞「行ク」についてはイカレルといった形式を最初から習得した可能性があるものの（イカレルは，東京方言を含めて母語話者のなかでも使用が多い），そのほかの五段動詞については，基本的に可能動詞を習得したものであろう．これが，長い間日本語を使用することがなかったことから，一段・カ変動詞同様に，受身・尊敬と同じ助動詞レル形を使用する方法に移行するといったパラダイムの単純化が進行しつつあるのではないかと推測される．

以上，助動詞レルの使用と次項で述べる二，三の点を除いては，パラオの日本語とシナリオの日本語には大きな違いはない．パラオの日本語には，一段動詞について助動詞ラレルが少ないように見えるが（パラオ 4.6%，シナリオ 17.6%），これは談話の内容に関連して選択された語彙の問題であろう．

3．2．2　インフォーマント間の相違

次に，パラオの5名のインフォーマントを個人ごとに見たときの特徴をまとめてみよう．次のようなことが指摘できる．

まず，助動詞ラレルや可能動詞との関連では，

(a) Tに，買エラレル・見エラレルなどの可能動詞＋ラレルのかたちが見出される．

(16) だが，わたしの同級生だったらもうみんな，ばーさんのように見えられるよ（T 1995.「ばーさんのように見える」能力（素性）をもつということを表現するために，可能形式を過剰に使用したもの）

(17) 15ドル［では］なんにも買えられないよ，今だったら（T 1995）

この形式は，幼児の母語習得の過程にも見出されるもので，まず可能動詞をチャンクとして習得した幼児（あるいは習得者一般）が，さらに可能動詞よりも融合度の低いラレルによる可能形式をインプットのなかに見出し，またそれを析出して，スル以外のすべての動詞から可能形式を生産的に派生する規則を身につけかけた段階（幼児の場合には3歳前後）で出てくる過剰一般化形式である（渋谷 1992）．Tは自身の日本語能力の低下を指摘する

が，このような習得のプロセスとは逆の（ミラーイメージの），日本語が摩滅する過程において，（再度）使用するようになった形式かもしれない．

次に，デキル類に関しては，次のような特徴がある．

(b) スルコトガデキルの使用は，AとTにのみ見出される．なお，スルコトガデキル7例の動詞は，見ル（2 例）・スル・話ス（A），買ウ・殺ス・暮ラス（T）であり，特に特定の種類の動詞について透明度の高いスルコトガデキルが使用されているといったことはなさそうである．

(c) 動名詞デキル（表の「デキル・VN」，売買デキナイ・発行デキル）を使うのは，Lだけである．

(d) 日本語中間言語に一般的に多いデキルの汎用，つまり，可能あるいは不可能であることだけをデキル・デキナイという形式によって述べ，その（不）可能である動作の内容は聞き手に語用論的に推論させるといったデキルの用法が，ここでも，相対的に日本語能力の低いMとYに観察される．(18) は「歩けない」，(19) は「行けない」といった，形態論的な操作を必要とする可能動詞の代わりに使用されたものである．

(18) R：何時間ぐらい歩くんですか

M：［アイライ［地名］から］マラカル［地名］かアラカベサン［地名］まで．あんまり，長くない．アルゴロン［地名］からガラルド［地名］はあんまり長くない．いまの若い人はあんまり<u>できない</u>（ね）．あんまり仕事しない．なまいき言って（M1994）

(19) R：［そこは］自動車で行けますか

Y：あー，<u>できない</u>．うん．道が悪いから．<u>できない</u>（Y1994）

以上いずれも，それぞれの話者の，日本語（可能表現）能力を反映するところであろう．その能力の具体的な内容については，4.2，4.3 でまとめる．

4　ヤップに残存する日本語の可能表現との異同

次に，3 節で確認したパラオの日本語における可能表現の特徴をより鮮明にするために，渋谷(1995)で確認したヤップ島に残存する可能形式の特徴とくらべてみることにしよう．

4．1　可能形式の用例分布：ヤップ

ヤップ調査は 1994 年 8 月 15 日～18 日に行った．表 8 にインフォーマントの属性を，

表8　インフォーマント一覧（ヤップ）

ｲﾝﾌｫｰﾏﾝﾄ	性別	生年	日本語学習歴
G	F	1919	公学校本科・補習科
P	M	1919	公学校本科・補習科
T	M	1925	公学校本科・補習科
C	M	1920	公学校本科・補習科
F	M	1925	公学校本科・補習科

表9　可能形式の用例分布：ヤップ（渋谷1995:85）

	（ラ）レル		可能動詞		デ　キ　ル			その他
	五段	他	五段	他	ｽﾙｺﾄｶﾞ	VN	―	
G	1	6	1	-	4	-	2	
	1	1	1	-	3	-		
P	1	-	1	-	4	-	2	
	1	-	1	-	4	-		
T	2	1	1	-	13	-	10	ｷｹﾙｺﾄﾃﾞｷﾙ
	2	1	1	-	5	-		
C	1	1	-	-	-	-	1	ﾉﾒﾚﾅｲ
	1	1	-	-		-		
F	1	-	-	2	-	-	3	
	1	-	-	1		-		
計(延べ)	6	8	3	2	21	-	18	2
使用率	10.0	13.3	5.0	3.3	35.0	0.0	30.0	3.3

表9に可能形式の用例分布を示す．調査方法は，2節「前回調査」に記したものと同じ．なお筆者の印象では，この順番（G＞P＞T＞C＞F）で日本語能力が高いと思われる．

4．2　特徴：ヤップ

表9および発話例から理解されるヤップにおける可能表現の特徴をまとめれば，次のようになる．(a) ～ (c) がインフォーマント間に見られた共通点，(d) と (e) が相違点である（詳細は渋谷1995を参照されたい）．

(a) 五段動詞の可能形は，「捕ラレナイ・シャベラレナイ・行カレナイ」のように，可能動詞よりも助動詞レルを付加したもののほうが多い．特にラ行五段動詞に多く観察される．

(b)「食べテイラレル・生キテイケル」のような，補助動詞がある場合の補助動詞部が可能形をとっている例はない．

(c)「勉強デキル」「案内デキル」といった，動名詞に直接デキルが付加した複合形式は使われていない．

(d) 日本語能力の高いと思われるインフォーマント（G・P・T）は（でも）スルコトガデキルを多用する．

(e) 日本語能力の低いと思われるインフォーマント（C・F）には，「魚デキナイ」（＝漁ができない）といった，デキルの意味を拡大して使う汎用が観察される．

(f)「お米をデキナイ」（＝お米を作れない．デキナイは汎用）のように，デキルがヲ格をとることがある．

(a) はパラオの場合と同じように，助動詞レルに不透明さ（多義性）をもたらす結果にはなっているが，一段動詞の場合と同じように受身や尊敬と可能を同一形式で表現し，不規則な形式（可能動詞）をパラダイムから排除しようとしたところと考えられる．また，(b) や (c) は複数の形態素を同時に処理するといった面倒な形態論的手続を回避しているところ，(e) は語彙項目における単純化であり，また (d) や (f) は，動詞部と可能部を別々に表現したり，対象語は常にヲ格でマークするといった，ことばを透明なものにしている（形式と意味が一対一で対応するようになっている）ところである．

いずれも単純化として解釈できよう．

4．3　2つの日本語可能表現の異同

ここで，表5（パラオにおける3回の調査の用例分布）と表9（ヤップにおける用例分布）によって，パラオおよびヤップに残存する日本語の可能表現の異同を整理してみよう．

まず共通点としては，次のようなことがある．

(a) 五段動詞について，助動詞レルによる可能形式が用いられること．ただし，行カレルについてはパラオ・ヤップの両方で多かったものの，ラ行五段動詞については，特にヤップにおいて顕著である．

(b) ラ抜きことばがほとんど見出せないこと．ヤップで採取された2例（いずれも食ベレナイ）は，動詞の形態論的な処理に問題を抱えがちなFのものであり，安定したラ抜きことばの使用をうかがわせるものではない．

(c)「食べテイラレル」のように補助動詞がある場合の補助動詞部が，可能形をとっている例はないこと．

(d) 一部の（比較的日本語能力の高い）話者にスルコトガデキルの使用が多いこと．

(e) 日本語能力が低い話者に，デキルの汎用が観察されること．

一方相違点としては，次のようなことがあげられる．

(f) パラオでは可能動詞の使用率が高いこと（パラオ 51.9%：ヤップ 5.0%）

(g) ヤップではスルコトガデキルの使用率が高いこと（パラオ 6.5%：ヤップ 35.0%）

(h) パラオのもっとも日本語能力が高いと思われる話者Ｌに，動名詞デキル形が使用されていること．

(i) 単独もしくは名詞に後接したデキル（表の「デキル・ー」）の使用は，ヤップに多いこと（パラオ 15.7%：ヤップ 30.0%）

ちなみに格については，パラオにも，次のような，対象をヲ格で表示した例はあるが，

(20) 私たち５年ま，（あねー），５年生まで，で，はな，日本語を使え（ま）す（M 2000）

ヤップで使われた，「お米をデキル」のような，デキルがヲ格をとった例は見出せない．

以上を総合すれば，次のようにまとめられるであろうか．

Ⅰ．共通点 (a) (c) (d) (e) をもとにすれば，先に 4.2 でまとめたように，パラオ，ヤップいずれの日本語にも単純化が起こっていると言える．

Ⅱ．単純化の起こる順序としては，

(a) 助動詞レルへの統合→ (d) スルコトガデキルの多用→ (e) デキルの汎用

といったことが伺われる（右側が，単純化がより進んだ日本語の特徴）．

Ⅲ．一方相違点をもとにすれば，パラオのインフォーマントの方が日本語能力が総じて高いと言える．

ただし，パラオ・ヤップ両地のインフォーマントを，単一の日本語可能表現能力スケールの上に位置づけることができるかどうかということについては，他の文法項目を分析するなかで，さらに検討してみる余地がある．具体的には，たとえば，スルコトガデキルと可能動詞の両者を使用するパラオのＡとＴの日本語能力と，スルコトガデキルを多用し可能動詞をあまり使わないヤップのＧ・Ｐ・Ｔの日本語能力を，同じ摩滅（習得）スケールの上に連続して位置づけて論じることができるかどうかといった問題である．

このことについて，本報告で取り上げたデータを見るかぎり，たしかにパラオの話者の日本語能力のほうがよく保持されており，スルコトガデキルと可能動詞の両者が使用されているのにたいして，それがさらに摩滅した段階が，スルコトガデキルのみを多用するヤップの話者の段階であると判断することができる．そしてその違いを，戦前・戦中のパラオの日本語習得環境がヤップのそれよりも高い日本語能力をもたらす可能性のあるものであったこと（渋谷 2001）を反映するものとして説明することもできるであろう．しかし，両者の中間言語の相違には母語があずかって，質的な相違をもたらしているという可能性も，現段階では否定することができない．可能表現については，特に中級レベルにある日本語学習者（話者）の場合，英語を母語とする者は可能動詞や助動詞ラレルを多用し，韓国語を母語とする者はスルコトガデキルを，また中国語を母語とする者はデキルを多用す

るといった相違があることが，すでに確認されているからである（渋谷 1998）．
いずれが妥当な見解か，ここでは判断を保留する．

5　まとめ

以上本稿では，シナリオのデータおよびヤップのデータと比較することによって，パラオに残存する日本語可能表現の特徴を明らかにした．まとめれば次のようになる．

(a) シナリオのデータとくらべたとき，パラオの可能表現には，日本語母語話者の使用する可能表現に近い実態が観察されるが，助動詞レルを多用する点が特徴的である（3.2.1）．

(b) パラオのインフォーマントの間には，日本語能力を反映した違いがいくつか見出される．たとえば，買エラレルといった過剰一般化形式を使用する（T），VNデキルを使用する（L），スルコトガデキルを使用する（A・T），デキルの汎用が観察される（M・Y），といった違いである（3.2.2）．

(c) パラオのデータをヤップのデータとくらべたとき，助動詞レルの使用・スルコトガデキルの使用・デキルの汎用といった共通点がある一方で，VNデキルの使用の有無（パラオで有），可能動詞・スルコトガデキル・単独あるいは名詞後接のデキルの使用率（可能動詞はパラオで高，他はヤップで高，4.3）といった点に違いがある．

(c) の違いについては，戦前・戦中にかけて日本人が多数居住していた，あるいは練習生の制度が設けられていたといった，パラオの日本語習得環境がヤップよりも有利に働いて，パラオの日本語話者のほうが高い日本語能力を維持しているといったことが考えられるが，母語の影響がそこに介在している可能性もまだ否定できない．今後の検討課題である．

参　考　文　献

渋谷勝己 1992「言語習得」真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹『社会言語学』135-158. おうふう

――――― 1995「旧南洋群島に残存する日本語の可能表現」『無差』2: 81-96. 京都外国語大学日本語学科

――――― 1997「旧南洋群島に残存する日本語の文法カテゴリー」『阪大日本語研究』9: 61-76. 大阪大学文学部日本語学講座

――――― 1998「中間言語における可能表現の諸相」『阪大日本語研究』10: 67-81. 大阪大学文学部日本語学講座

――――― 2001「パラオに残存する日本語の実態－報告書・序章－」真田信治編『消滅に瀕した日本語方言の調査研究』（科研報告書）pp.285-302.

（しぶや　かつみ）

sbj@let.osaka-u.ac.jp

The remnants of Japanese in Palau:

Potential expressions

SHIBUYA Katsumi
(Osaka University)

This paper aims to describe the use of potential expressions in the Japanese spoken by senior people in the Republic of Palau as their second language, using the conversation data obtained from five speakers. The following are the characteristics of the use:

(a) Palauans tend to use an auxiliary verb *–areru* with strong verbs (consonant stem verbs), but other aspects of its potential expressions are similar to those employed by native speakers.

(b) Comparison with the Yapese Japanese which is also spoken by former learners of Japanese in Yap, Federated States of Micronesia, on the other hand reveals that the two varieties of Japanese differ from each other in that Palauans employ morphologically complex potential verbs much more often than Yapese speakers, while they (=Palauans) use a periphrastic expression *suru-koto-ga-dekiru* and an archiform *dekiru*, which are the typical forms of simplified Japanese, less often.

The differences described in (b) above may be attributable to the sociolinguistic conditions (outlined in Shibuya 2001) which may have been quite conducive to the acquisition and maintenance of their second language before and during World War II. The influences of their mother tongue remain to be further investigated.